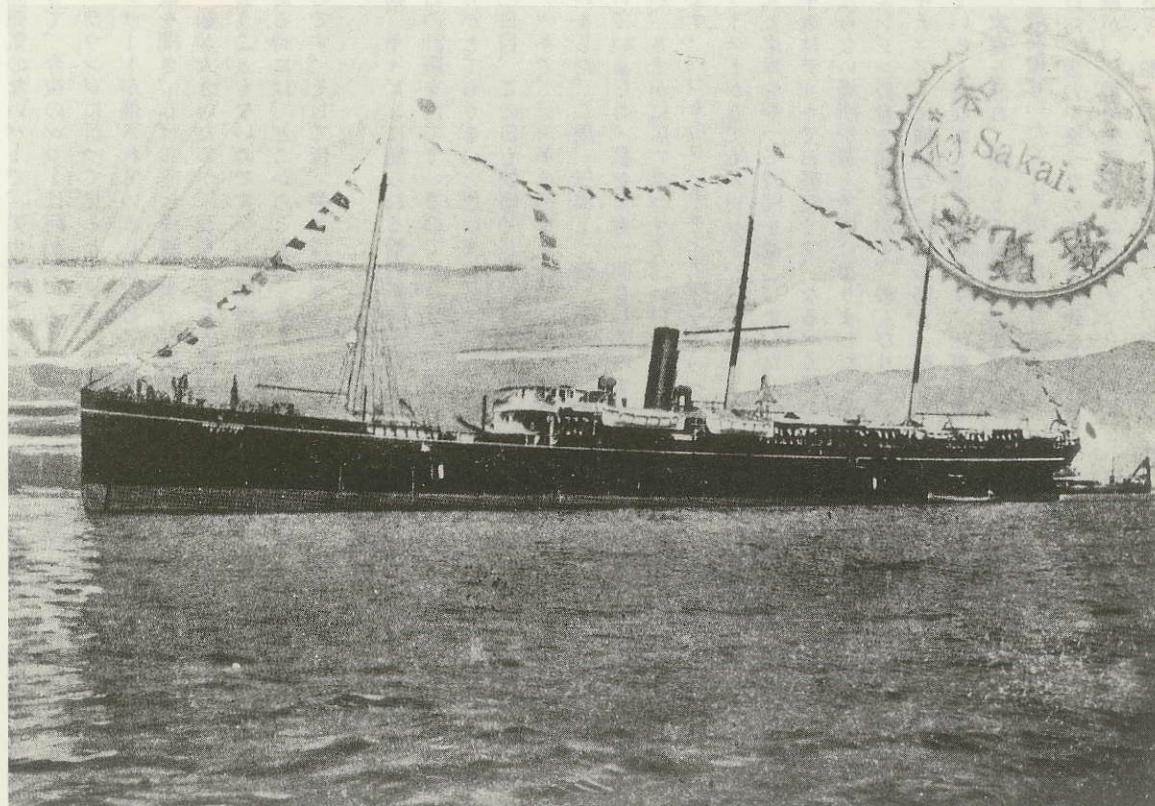


おせつ丸

《主要目》鉄製貨客船、尾城汽船所属、3,502総トン、主機二連成汽機、速力13ノット、1880年英國ハーランド&ウルフ造船所建造、前名ロセッタ ROSETTA

明治に生まれた日本初のクルーズ船、満韓巡遊船



客船の復権

第二次大戦後、ジェット旅客機の目覚ましい台頭により、交通機関としての使命を終えたかにみえた旅客船が、クルーズ客船という新しい装いで再び黄金時代を迎えるとしている。

かつて定期客船の檻舞台であつた北大西洋航路では、ドイツの快速巨大船「ブレーメン」がデビューした一九二九年に、年間約百万人の旅客が大西洋を横断した。ところが今や、カリブ海や北米西海岸では、それに数倍する膨大な数のレジャー客がクルーズ客船による船旅を楽しんでいる。

日本でもようやく最近、航洋客船によるクルーズへの関心が高まり、「ふじ丸」「おせあにづく・ぐれいす」といつた本格的なクルーズ客船が誕生したことは周知のとおりである。こうした客船の派手な復活を、いつたい誰が予想しただろう。

クルーズ客船というのは、ひとことでいえば、観光地を周遊航海するレジャー主体の客船のことだ。この場合、船客が船をホテル代わりに利用する点が大きな特徴であり、目的港に着いたら客がさつさと下船してしまうか、定期客船とは根本的に性格を異にしている。よくいわれることだが、入港が遅れる

と定期客船では客から文句が出るが、クルーズ客船では逆に喜ばれるのである。

クルーズの始まり

このように、船を使って観光地を周遊するというアイデアは、古く木造外輪汽船の時代からあつた。筆者の知るところでは最初の着想者は、英國の老舗船会社P&O社の創立者の一人であり天性の楽天家だったアーサー・アンダーソンらしい。

一八四四年にP&O社は、彼のアイデアにより、自然景観と古代史跡に恵まれた地中海東部のローカル航路を、寄港地での観光付きのクルーズ航路として精力的に宣伝し、周遊チケットを売り出した。同年、英國の文豪ウイリアム・サッカレイは、P&O社の招待でこの航路を旅し、後に紀行文を発表してクルーズの楽しみを世に紹介している。この地中海クルーズは、クリミア戦争が勃発するまで十年間続けられた。だが、これはいわば、既存の定期サービスの売り方に味を付けただけのものであり、専用の客船による現代的なクルーズとは違う。

今日のような本格的なクルーズ・サービスが誕生したのは、それから三十年ほど後の一八八〇年代にはいつてからのことだ。一八八一年に英國のある個人船主は、P&O客船の

「セイロン」を買い取ってクルーズ客船に改裝し、史上初の世界一周クルーズを成功させており、一八八九年には英國のオリエント・ラインが、地中海とノルウェーへのクルーズを開始している。次いで一八九一年にはドイツのハンブルク・アメリカ・ラインが、クルーズを主目的に設計された世界最初の客船「オセアナ」をデビューさせた。

ろせつた丸のクルーズ

西欧先進国で本格的なクルーズ・サービス

が誕生してわずか数年後、まだ極東の小国だった明治の日本に、現代風のクルーズ客船が出現している。一九〇六年（明治三十九）年七月二十五日に横浜を出帆した「満韓巡遊船ろせつた丸」がそれである。

天齊正のほか落語家二人が乗っていた。

朝日新聞社のチャーター船「ろせつた丸」は、P&O社の豪州航路定期船「ロセツタ」の後身で、P&O社が英國ハーランド&ウルフ造船所（「タイタニック」「キャンベラ」などの建造所）に発注した最初の船として知られている。その後、姉妹船の「ロヒラ」とともに日本船となり東洋汽船が運航していたが、この満韓巡遊船就航当時は、横浜の尾城汽船の手に渡っていた。

わが国最初のクルーズ客船が、十九世紀にクルーズというユニークな運航方式をあみだしたP&O社の有名船であったという史実を知るとき、筆者は、何か因縁めいたものを感じると同時に、船舶史研究の面白さを覚えずにはいられない。

（山田　迪生）

これを企画し主催したのは朝日新聞社であるが、見学地の選択に新聞社らしさが窺われ

る。どちらかといえば、レジャー色を薄めた観察クルーズ的な航海である点は、日本で現在、クルーズの主流となっている研修船、青年の船に相通じるものがあつて興味深い。

船賃は十八（六十円（食費は別料金）。乗船者は三百七十八人で、会社員、教員、商人、公務員、僧侶、学生など、あらゆる階層に及んでいた。お年寄りか自営業者しか楽しめない現今クルーズと違つて、明治人にはゆとりがあつたのだろう。また、航海中のエンタテイナーとして、講談師宝井琴窓、手品師帰天斎正のほか落語家二人が乗つていた。

横浜、大阪、呉（海軍工廠）、門司（若松製鉄所）、釜山、仁川（京城）、鎮南浦（平壤）、大連（奉天、遼陽など）、旅順、長崎（三菱造船所）、佐世保（海軍工廠）、神戸（川崎造船所）、横浜。（）内は見学地。

これを見学したのは朝日新聞社であるが、見学地の選択に新聞社らしさが窺われる